

週刊 **TOILET WALL PAPER**

レバーを
引いたら
流れる話



服が欲しくてたまらない **Vol.0** **へビーウェイト** アユリ・シベリアンハスキー

68 円の納豆か 98 円の納豆か 128 円の納豆か。
 68 円の納豆は味は悪くはないし、98 円の納豆は出汁が効いている。
 128 円の納豆は粒がふっくらしっとりとしていて爆発的に美味しい。
 スーパーの店内を 60 円の差額分彷徨う。
 給料日は 4 週間後、だけれども今日の私はよく働いた気がする。
 夢が叶うならさけるチーズも食べたい。しかし、3 日後にクレジットカードの引き落としという世にも恐ろしい出来事が待っている。
 買う理由、買わない理由、いくらでもある。
 見切り品コーナーに雑に放られたいつも 128 円の納豆に 20 円引きのシールが貼られていた。心の中で「ジーザス」と叫ぶ。見切り品の納豆から後光が差している。
 血の池からそっと 20 円引きのカンダタを救い出すと、血の池の中では他の見切り品が「俺も俺も」と食欲を誘うパッケージを見せつけてくる。
 見切り品なんてこの世から無くなればいいと思う。
 食品を無駄にってしまうことはもちろん腹立たしいが、30 代になり「見切り品」という言葉そのものに悪意を感じられるようになった。
 血の池から目を逸らし、カンダタをカゴに入れる。
 カンダタにとって私は同じ値引きシールを額に貼り付けた仏だろうか。
 いや、今日はカンダタこそが私の神だ。

毎月「先月は使いすぎたなあ」と思うことが、もはや習慣か意味のない儀式になっている。3 日後、スマホで笑えるほど減った預金残高を確認し、メールをチェックする。
 「値下げしたお気に入りアイテムがあります」
 「再入荷のお知らせ」
 「本日商品を発送しました」
 「期間限定 BIG SALE!!」
 息を深く吸い込み、クリック・スワイプ・スクロール・クリック・カゴに入れる・クリック。休憩室で仕事よりも高い集中力と効率の良さで缶コーヒー片手にショッピングを片付ける。「なんでお昼ご飯食べないの?」と珍しがられることもあったが、職を変えて 1ヶ月もすれば皆その光景が日常になる。
 私は 5 年間およそ 4 年 2 ヶ月分のお昼ご飯を食べていない。
 職場でしか会わない親切な同僚と食事をしながら当たり障りのない会話をするよりも、

この時間にお気に入りアイテムが売り切れないか、定時で上がったあとの駅ビルに行くか考えることの方が重要だと思っている。
 そして毎日の 100 円のおにぎりより 30 日分で一枚のスカーフの方が大切なのだ。

就業を告げるベルとともに立ち上がり、一直線にファッションビルへ向かう。
 1980 円の T シャツか 3980 円の T シャツか 6500 円の T シャツか。
 1980 円の T シャツは裸で外出せずに済むし、
 3980 円の T シャツは洗濯機の暴行に耐えられる。
 6500 円の T シャツは肩の切り替え位置が抜群に良い。
 ショップの中を 4520 円の差額分彷徨う。
 6500 円の T シャツを買う理由はいくらでも思いつく。さっきから肩の切り替えの位置が抜群に良いことばかり考えている、もしかして好きなものかもしれない。
 ショップの奥にあるセール商品を集めた一角に 6500 円の T シャツによく似た T シャツが 20%OFF の札を下げて掛けられていた。
 心の中で「ジーザス?」と問う。もちろん肩の切り替えの位置は抜群に良い。セール商品の T シャツからは微かな後光が漏れている。
 20%OFF のカンダタを手にする。するとセンスのいい閻魔大王が
 「今年出たものは USA コットンのヘビーウェイトを採用しております、こちらは去年までのモデルのためお安くなっております。」と笑顔で話しかけてくる。
 むむ、ヘビーウェイト…
 型崩れがしにくくインナーの透けない逞しさと美しさを兼ね備えた生地…
 20%OFF のカンダタに問かける。「アューヘビーウェイト?」
 「いや、僕は軽やかで柔らかい着心地のライトコットンさ。」

蜘蛛の糸がプツンと切れる。
 そして合衆国の蜘蛛男の様に大量の蜘蛛の糸をショップの入り口からすぐの平台に発射する。平台の 6500 円のオフホワイトの T シャツを手にする。一本の糸では引き上げられないヘビーなウェイトの魂。
 とりあえずオフホワイトを連れて帰って気に入ったらブラックを助けに行こう。
 すると先ほどまで閻魔大王がフレンドリーなオシャレ野郎に変わり

「やっぱり定番のホワイトは外せないですよ!でも今年はブラックが人気で、このサイズはラスト一枚なんですよ!ちなみに今キャンペーンをやっておりまして、2 点購入で 10%OFF なんですよ!」と悪魔が獲物を見つけた真夜中のフクロウの目で話しかけてくる。
 悪魔の目に吸い込まれた瞬間、身体を自由を奪われブラックの魂を掴んだ手が離せない。気付けばレジで悪魔と取引をしている。ダブルヘビーウェイトが懐に重くのしかかる。「洗濯もガンガンしちゃって大丈夫なので、沢山着てくださいね。あと新作のカタログ出たので入れておきます。」と笑顔で丁寧に包まれた二枚の魂を差し出した。
 この悪魔、絶対に T シャツを裏返して一枚ずつネットに入れて洗濯するタイプだ。「またの取引お待ちしております!」
 悪魔に見送られて街に出ると、不思議と気持ちはライトコットンのように軽い。
 さて、この T シャツに合うボトムスでも見に行くか。

服が欲しくてたまらない。これはひとつの病なのかもしれない。
 納豆の葛藤を無効化し確実に懐を蝕む、残念で素敵なこの病。
 明らかに収納しきれない洋服たちの森は時折私に罪悪感をもたらすが、部屋でコケた時に私の頭を守ってくれた恩人でもある。
 本当にお洒落な人は断捨離上手という記事をヘッドが出るほど見てきたが、毎朝のストイックとは無縁の服選びは宝探しだ。いくら病的であっても私にとっては服に翻弄される日々ほど尊いものはない。特別にお洒落でもなければ、他人からの沢山の「いいね!」よりも自分の 1 件の「いいね!」が欲しい。

しかし、アウターを 4 着買ったとある冬、事は起こるべくして起きた。
 目の前には当の本人が引く程、激減した預金残高があった。自宅に広がる洋服の森に恐怖を覚えた。そして、それでもなお服が欲しくてたまらない自分自身に。
 「服が欲しくてたまらない」は服と預金残高と私のおよそ 1 年半に及ぶ戦いの記録である。試行錯誤と学び、おもに失敗。
 今もなお続くその戦いを勝手にお届けさせていただきたい。
 次回「服が欲しくてたまらない Vol.1 服欲日誌」ちょっとした実用編、かみんぐすーん。

